

巻頭によせて



校長 北村 聡

Kitamura Satoshi

徳川家康は遺訓「堪忍は無事長久の道、怒りは敵と思え」を残し、また、新島襄は「忍は矢張り卑屈とは違い、世に勝つ的一大元素なり」と述べています。

自分のことを完全に理解してくれる人など存在しません。イエス・キリストでさえ弟子に裏切られ、また知らないと逃げられ、十字架にかけられたのであります。

理不尽は常のこと、あまりの言動に腹立たしく、怒りを禁じ得ないことがあります。しかし冷静になってみると、そもそも自分のことを完全に理解してくれる人間などこの世に存在しないことに気づきます。人である以上、たとえ家族であっても100%理解することは不可能です。

批判や中傷に対して怒りを発することがないのは卑屈ととる向きもあろうかと思いますが、堪忍、忍耐は決して相手の怒りに屈することではなく、ましてや負けたことになるものでもありません。そんな相手と同じ土俵に立つ必要はなく、つまらぬ事で時間と気力を浪費するだけです。

そんな暇があれば、自分こそ人から受けたご恩を軽く見過ごしていないか、義理人情にもとる言動をしていないかを常に考え、過ちとみればすぐに改めるよう努力することです。「我こそは善人なり」との所謂「善人誇り」の思いこそ、また人を「不理解者」「役立たず」としてののしることこそ、地獄の始まりであります。自らに反省を加えながら生きることで、人間は限りなく成長していきます。そういう自分に「肯定感」を持つことです。

病気や怪我で家事の出来なくなった家族、仕事や勉強が出来なくなった家族を見放すでしょうか。「存在しているだけでありがたいもの」、それが家族です。